

ピアノから紡ぎ出された音色が、子育てで疲れ気味の母親たちの耳に優しく響き、心に新しい力を吹き込んでくれる。そんな自閉症児の母たちのためのコンサート。5回目は31日、ミュージザ川崎(川崎市幸区)の市民交流室で開かれる。

自閉症児を育てている母親たちの苦労は20年近く前、留学先のロンドンで知った。下宿を経営していた夫婦の間に生まれた青い瞳の男の子ジェイミーは自閉症だったが、両親は「彼はまだ夢の中にいる

のよ」と言って病気を認めたらなかった。彼ら3人と暮らした2年間、振り返ると混乱と悔恨ばかりだった。将来への不安を抱えた母の不安定さは、そのまま合わせ鏡のようにジェイミーに映し出された。夜中に突然目覚め、本棚をぐちゃぐちゃにしたり、大音量でテレビをつけたりし、しかるほど

エスカレートした。家族以外には嫌悪感をむき出しにする。ピアノを弾いていると、物を投げたりして練習を邪魔することもあった。個人主義の国だから、家庭内のことに首は突っ込めない。でも、「もう一歩踏み込めなかったらどうか」「もっとなるとかできなかったか」という思いが空回りした。苦悩し

一緒に心から離れなくなつた。ピアノとしての評価も高まり、国内と海外を演奏で行き来していた2002年、川崎市内で自閉症児の治療に力を尽くしている音楽好きの歯科医と出会った。「自閉症の子どもが生まれたことで、生活が一変するのは残念。母親には心安らかなれる時間

へ。」

母の愛 音楽で支える



くみーずあひら

自閉症児を育てる母親のための
コンサートを開く

小川 典子さん 45

(川崎市)

一たる
ミ語ん
イ生活を
ジェと日小

ながら過ごした下宿先に別れを告げたのは2年後。それからというものが、ジェイミーの青い瞳が、苦い思い出と

が必要なんです」と話しかけたところ、自閉症児を育てている母親を紹介され、コンサートの準備が始まった。子育てを離れ、集った母親は「久しぶりにおしゃべりをして出かけた」「音に癒やされた」と笑顔を見せる。年1、2回のペースで開催すること

に。ジェイミーには昨年渡英した際、再会できた。すっかり大人びて、たくましくなったが、澄み切った青い瞳だけは変わらなかった。もう両親の手に余り、施設に入っているという。

自閉症児たちの瞳を輝かせるのはきつと、困難にめげない母親たちの愛情の強さなのだろう。「その心を音楽で少しでも支えたい」。それが、一人のピアノリストとしての願いだ。

◇

「ジェイミーのコンサート」の問い合わせは、竹内歯科医院内の事務局(044・511・2955)

(今川友美)